

博物館で楽しむ横溝正史

期日 平成十八年

三月十八日(土)～六月十一日(日)

前期 三月十八日(土)～四月二十七日(木)
後期 四月二十九日(土)～六月十一日(日)

金出番でさへ

主催：狭山市立博物館

監修：横溝亮一

協力：浜田知明/杉本一文/香月みか
世田谷文学館



狭山市立博物館

〒350-1324 埼玉県狭山市稻荷山1-23-1(狭山稻荷山公園内)
電話:04-2955-3804 FAX:04-2955-3811
<http://www.city.sayama.saitama.jp/museum/>

©杉本一文/香月みか

R100

開催にあたって

狹山市立博物館は平成3年の開館以来、多くの博物館事業を行ってまいりました。

その一つに企画展覧会の実施があります。当館は「総合博物館」として、毎回自由な発想で展覧会を企画しており、郷土さやまを探り上げた地域性の高い展示から、絵画展や楽器展などのように広く文化を紹介するものまで、従来の博物館の展示とは、少し視点を変えて情報の発信、提供をしています。

このたびの春期企画展のテーマは「横溝正史作品から味わうミステリー世界」です。

文学のなかでも「ミステリー」という分野には、多くの方が心奪われた経験があることだと思います。今回の企画展ではこのミステリー文学に焦点を当てました。

現在、書店や図書館において数多くの書物が並べられていますが、ミステリーは老若男女を問わず親しまれています。なかでも、横溝正史作品は時代が移り変わっても 決して色あせることなく、多くのミステリーファンに読み続けられています。

今回はミステリーを「知的な楽しみ」ととらえ、当館ならではの立体的な展示で紹介します。

時を忘れて本に夢中になった「あの頃」を思い出し、本棚に眠る懐かしい作品を再び手にとっていただけるように、また、ミステリーは初めてという方には、堅苦しくなくお楽しみいただき、ミステリーファンになっていただけるような展示を創りました。

狹山市立博物館が挑むミステリーの世界で、春の楽しいひとときをお過ごしください。

最後になりましたが、本展開催にあたり監修をいただきました横溝亮一氏、企画・資料両面について真摯なご協力をいただきました浜田知明氏、貴重な資料を快くご提供いただきました杉本一文氏、香月みか氏、世田谷文学館、そして、展示にご協力いただきました関係各位に厚く感謝とお礼を申し上げ、開催のごあいさつといたします。

平成18年3月 狹山市立博物館



▲本格探偵小説の骨格と、波乱万丈の伝奇浪漫を巧みに融合させた傑作「八つ墓村」は、多くの本が出版された（個人蔵）

期日 平成18年

3月18日～6月11日

前期 3月18日(土)～4月27日(木)

後期 4月29日(土)～6月11日(日)

博物館で楽しむ横溝正史
平山香であります。

●開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

●入館料：一般 150円（100円）

高・大生 100円（60円）

小・中生 50円（30円）

（ ）内は20名以上の団体料金

*土曜日：こどもの日は、小・中学生は無料

*国際博物館の日（5月18日～24日）は全員無料

「わが父横溝正史」

横溝亮一氏（音楽評論家・横溝正史長男）

期日：4/22(土)

時間：午後1時30分～3時（要予約）

「イラストレーター：杉本一文サイン会」

70年代横溝正史ブームの主役となった角川文庫。この時、横溝作品のすべてのイラストを担当された杉本一文氏が、あなたの文庫にサインします。貴重なお話を伺えそうですね。

期日：4/22(土) 時間：午前10時～12時

期日：5/3(水) 時間：午後1時～3時

*時間内に「企画展示室」にお越しください。

（杉本氏のカバー一本に限ります。サインはお一人2冊までです。）

「横溝正史作品」朗読会

—横溝正史の原点である初期作品をお楽しみください—

期日：4/1(土)『恐ろしき四月馬鹿（エイプリルフール）』

5/21(日)『かいやぐら物語』

時間：午後2時～2時30分

期間中のその他の催し

◆茶席

期日：3/26(日)・4/15(土)・5/13(土)

時間：午前11時～3時頃

◆レクチャーコンサート「放浪樂師が、やってきた！」

＜中世ヨーロッパの音と樂器＞

♪演奏とお話：ジョングルール・ボン・ミュージシャン

期日：4/16(日)

時間：午後1時30分～3時

◆「若武者になろう！」甲冑着付け

期日：5/4(木)・5/5(金)（要予約）

狹山市立博物館

〒350-1324 埼玉県狹山市稻荷山1-23-1（狹山稻荷山公園内）

電話：04-2955-3804 FAX：04-2955-3811

<http://www.city.sayama.saitama.jp/museum/>



◆西武池袋線「稻荷山公園駅」より徒歩3分

◆西武新宿線「狹山市駅」西口よりバス「稻荷山公園駅行」終点徒歩3分

◆圏央道狭山日高インターチェンジより車で15分

金田一 さとり で す。

博物館で楽しむ横溝正史

期日 平成十八年
三月十八日(土)～六月十一日(日)

主催・狭山市立博物館 監修・横溝亮一
協力・浜田知明／杉本一文／香月みか
世田谷文学館



狹山市立博物館



CONTENTS

-
- 1 開催にあたって
凡例
-
- 2 横溝正史年譜
-
- 4 本格探偵小説の世界標準 浜田知明
-
- 6 素顔の横溝正史 橋爪 憲
-
- 7 横溝正史作品との出会い 杉本一文
-
- 8 絵のある風景 —横溝正史の世界— 香月みか
-
- 10 参考文献
ご協力いただいた方々
-
- 11 企画展特別掲載「甲蟲の指輪」
〈「新愛知新聞」付録「家庭シンアイチ」 昭和6年7月5日〉
-

表紙・挿し絵：杉本一文 & 香月みか

開催にあたって

狹山市立博物館は平成3年の開館以来、多くの博物館事業を行ってまいりました。その一つに企画展覽会の実施があります。当館は「総合博物館」として、毎回自由な発想で展覽会を企画しており、郷土さやまを探り上げた地域性の高い展示から、絵画展や楽器展などのように広く文化をご紹介するものまで、従来の博物館の展示とは、少し視点を変えて情報の発信、提供をしています。

このたびの春期企画展のテーマは「横溝正史作品から味わうミステリー世界」です。

文学のなかでも「ミステリー」という分野には、多くの方が心奪われた経験があることだと思います。今回の企画展ではこのミステリー文学に焦点を当てました。

現在、書店や図書館において数多くの書物が並べられていますが、ミステリーは老若男女を問わず親しまれています。なかでも、横溝正史作品は時代が移り変わっても決して色あせることなく、多くのミステリーファンに読み続けられています。

今回はミステリーを「知的な楽しみ」ととらえ、当館ならではの立体的な展示でご紹介します。

時を忘れて本に夢中になった「あの頃」を思い出し、本棚に眠る懐かしい作品を再び手にとっていただけるように、また、ミステリーは初めてという方には、堅苦しくなくお楽しみいただき、ミステリーファンになっていただけるような展示を創りました。

狹山市立博物館が挑むミステリーの世界で、春の楽しいひとときをお過ごしください。

最後になりましたが、本展開催にあたり監修をいただきました横溝亮一氏、企画・資料両面について真摯なご協力をいただきました浜田知明氏、貴重な資料を快くご提供いただきました杉本一文氏、香月みか氏、世田谷文学館、そして、展示にご協力いただきました関係各位に厚く感謝とお礼を申し上げ、開催のごあいさつといたします。

平成18年3月 狹山市立博物館

凡　例

1. 本書は平成18年3月18日から6月11日までを会期とする企画展「金田一さん！出番です —博物館で楽しむ横溝正史—」のパンフレットである。
2. 図版は展示資料の一部である。展示資料は会期中に展示替えをおこなう。
前期：3月18日(土)～4月27日(木) 後期：4月29日(土)～6月11日(日)
3. この企画展は、石川友子・小渕良樹・名雲教子が担当した。

横溝正史年譜

年	年齢	
1902(明治35)		5月24日、兵庫県神戸市にて、父宣一郎、母波摩の三男として生まれる。
1907(明治40)	5	母波摩死去。
1908(明治41)	6	継母に浅恵を迎える。
1909(明治42)	7	東川崎尋常小学校に入学。
1915(大正4)	13	神戸二中に入学。
1917(大正6)	16	中学2年のとき同学年の西田徳重と知り合う。
1920(大正9)	18	神戸二中を卒業し、第一銀行神戸支店に勤務。 秋に西田徳重が死去し、兄の西田政治と交流が始まる。
1921(大正10)	19	4月、処女作『恐ろしき四月馬鹿』を発表。 大阪薬学専門学校に入学。
1924(大正13)	22	大阪薬学専門学校を卒業し、実家の生薬屋を継ぎ、薬局・春秋堂を開局。
1925(大正14)	23	江戸川乱歩と初めて会い、西田政治とともに「探偵趣味の会」に参加。
1926(大正15)	24	最初の著書『広告人形』を刊行。乱歩に招かれ、上京。 博文館に入社し、『新青年』の編集に携わる。
1927(昭和2)	25	神戸で中島孝子と結婚。3月、『新青年』の編集長になる。
1928(昭和3)	26	長女宣子が生まれる。
1931(昭和6)	29	長男亮一が生まれる。
1932(昭和7)	30	博文館を退社し、作家専業となる。
1933(昭和8)	31	5月7日、喀血し、富士見療養所で療養、秋に帰京。
1934(昭和9)	32	先輩友人代表の水谷準から1年間の執筆停止と転地療養を勧告され、上諏訪に転地し、闘病生活に入る。
1935(昭和10)	33	病床で書き上げた『鬼火』により再起。
1936(昭和11)	34	この年より、由利・三津木ものを中心に作品を量産。
1937(昭和12)	35	捕物帳に着手。翌年、『人形佐七捕物帳』から連載。
1939(昭和14)	37	次女瑠美が生まれる。年末、吉祥寺に帰居。
1940(昭和15)	38	この頃から探偵小説への圧迫が強くなり、終戦までは捕物帳や伝奇小説、時局小説のみを発表した。
1945(昭和20)	43	4月、岡山県吉備郡岡田村字桜に疎開。
1946(昭和21)	44	『本陣殺人事件』(金田一耕助初登場作)を発表。併行して『蝶々殺人事件』を連載。

1947(昭和22)	45	『獄門島』を連載。
1948(昭和23)	46	『本陣殺人事件』が第1回探偵作家クラブ賞長編賞を受賞。 8月、東京へ引き揚げる。
1950(昭和25)	48	連載八本をかかえ、一時、病床に臥す。
1955(昭和30)	53	金田一ものの長編二本を併行連載。以後、長編化作品を主に、 金田一ものを量産。
1959(昭和34)	57	軽井沢に別荘を構え、以後毎年夏の避暑地とする。
1962(昭和37)	60	日本探偵作家クラブにより、合同還暦祝賀会。
1963(昭和38)	61	日本推理作家協会賞選考委員を務める。
1964(昭和39)	62	『夜の黒豹』刊行後、探偵小説の発表が途絶える。
1969(昭和44)	67	江戸川乱歩賞選考委員を務める。
1970(昭和45)	68	講談社より『横溝正史全集』10巻を刊行。
1971(昭和46)	69	角川文庫にて『八つ墓村』を刊行(角川文庫第1冊目)。
1972(昭和47)	70	古希記念に、講談社より『探偵小説五十年』を刊行。
1974(昭和49)	72	講談社より、10年ぶりの新作『仮面舞踏会』を収めた『新版横溝正史全集』18巻を刊行。角川文庫版の著作が300万部を突破。
1975(昭和50)	73	日本推理作家協会賞選考委員を務める。
1976(昭和51)	74	勲三等瑞宝章を受章。 映画、テレビによる作品の映像化が相次ぎ、角川文庫版の著作も1200万部を突破。
1980(昭和55)	78	最後の作品となった『上海氏の蒐集品』を発表。
1981(昭和56)	79	第1回横溝正史賞授賞式。角川文庫版の著作が5500万部に達する。 12月28日、結腸がんのため死去。

＜参考資料＞

「年譜」中島河太郎 (『横溝正史追憶集』水谷準編 横溝孝子発行 1982)

「決定版年表 横溝正史&金田一耕助が歩んだ100年ちょい」浜田知明

(『金田一耕助 The Complete』小嶋優子&別冊ダ・ヴィンチ編集部)



本格探偵小説の世界標準

浜田知明

「日本では横溝正史が抜群であり、作家としての力量は世界のベストテンにはいりうる」「ベスト・テン以上、ベスト・ファイブにランクしうる才能であると思っている」（『推理小説論』より）

「堕落論」などで有名な無頼派の作家で、自身も『不連続殺人事件』という探偵小説を書いた坂口安吾氏が、そう断言したのは、昭和25年のことでした。

この評価は現在にいたっても変わっていません。横溝ミステリーに追いつきかけた作家は現れても、誰一人として追い越すことは出来なかったのです。

にもかかわらず、横溝氏に対して、日本で初めて論理を主眼とする本格長編探偵小説を定着させた作家、その魅力を分かりやすく普及させた作家といった、歴史的意義ばかりが強調されるのは、残念なことです。

そうなった原因が、昭和50年代のブームの要因を、“土俗的な匂い”や当時“流行のオカルト趣味”にあるとした、批評家たちの皮相的な分析や、あまりにも不適切な映像化にあったことは指摘しておく必要があるでしょう。横溝作品の魅力は、何よりもまず、確かな論理の骨格に支えられた、物語の収束感(収まるべきものが、収まるべきところへ収まったという読後感)にあるのです。

「これ、こういう手毬唄の形式としてはおかしいと思うんです。三羽のすずめが語るときには、三羽とも娘のことを語るべきです」

これは、『悪魔の手毬唄』において、金田一耕助が真相に迫る第一歩となった推理の一節ですが(角川文庫版 337頁)、横溝作品では、このように、事件に一貫する法則と、その乱れとが、非常に重要な役割を果たしています。

『八つ墓村』は、その特長が最大限に活かされた作品であるにもかかわらず(角川文庫版 194、248、472頁)、長い間、この一番のポイントが見逃されてきましたし、被害者が、斧・琴・菊(よきこと聞く)になぞらえられて殺されていく『犬神家の一族』では、最後の犠牲者にだけ、斧そのものが使われなかつたことが決定的な手掛けりの一つであるのに(角川文庫版 315、406頁)、映画版では、斧による殺人へと変更されてしまっていました。

同じく、『犬神家の一族』での首斬りが、二つの点で重要な意味を持つ行為であったことを考えれば(角川文庫版 383頁)、倒れた吊り鐘や、大時計の歯車によって、バラバラ死体を無理矢理追加し、グロテスクな部分ばかりをいたずらに強調した、映画版の『獄門島』や『女王蜂』が、どれほど心ない改悪であったかが、わかるはずです。

横溝作品では、必要以上の死体への冒浣行為は、決してなされて

いないので。それがどれほど邪悪な意図によるものであろうとも、確固たる理由があつての行為であることを読み取ってください。

また、横溝作品が、ミステリーとして“易しい”ものとの誤解を受ける理由の一端として、人物造型の的確さが挙げられます。トリックの都合から逆算されたとは思えないほど、物語の中で躍動感をもって描かれている登場人物たちを見てください。

『獄門島』における、幸庵医師の困った酒癖が、単なる物語の彩りとしてでなく、二重三重の意味を持っているのが(角川文庫版77、200、210、259、314頁)、その典型的な例ですし、それとは逆に、全編のほとんどを書簡形式にした「車井戸はなぜ転る」や、事件の当事者の視点を貫いた『三つ首塔』では、人物像と結びついた叙述形式の臨場感に目を奪われて、探偵小説としての趣向に気づくことのないまま、読みおえてしまうこともあるほどです。

“易しい”ミステリーであるかのような印象を与えててしまうほどに、トリックやロジックと、人物、ストーリーとが、あまりにも高度な次元で密接に結びついているのが、横溝作品の、もう一つの大きな特長です。

さらには、『本陣殺人事件』を、疎開中の探偵作家が、昔起こった事件の話を聞かされて、それを書き綴ったものとし、『蝶々殺人事件』には、事件関係者の手記を織り込むといった、形式の選択の的確さ。

「論理の骨格に

ロマンの肉附けをし

愛情の衣を着せましょう」

そう書いた横溝正史氏の作品には、本物の探偵小説の面白さを知るための諸要素がギッシリ詰まっています。

金田一耕助もののみならず、「鬼火」「蔵の中」「かいやぐら物語」などの妖異耽美な諸作品(「蔵の中」での、作中の区切り方の工夫に注目してください。ちくま文庫版 133、153、164頁)、人形佐七、お役者文七をはじめとする捕物帳、『神変稻妻車』『髑髏検校』『変化獅子』『菊水兵談』『不知火奉行』といった伝奇時代小説、『大迷宮』『仮面城』などの少年少女向け探偵小説と、横溝正史氏は、その多彩な作風のひとつひとつで、ゆうに一家をなすほどの大家ですが、それらが余技としか見えないほど、本格探偵小説群は、ひときわ高く、力強く、美しくそびえています。

過熱気味だったブームが去り、原作に即した映像化もされるようになった今こそが、再評価の本当の機会なのです。この展示会をきっかけに、じっくりと腰を落ちつけて、作品を味読してくださることを願ってやみません。

(探偵小説研究家)



素顔の横溝正史

橋爪

懋

横溝正史という作家のイメージは、一般にどう受け止められているのだろう。

その作品世界から、さぞかし、厳格で怖い人と思われているのではないかだろうか。

晩年の横溝先生を知る一人として、その素顔を是非語り伝えたい。担当編集者だけが知っているエピソードを紹介しながら、偉大な探偵小説作家の人柄を偲んでもらえたら幸いである。

まず最初に思い浮かぶのは、優しくてサービス精神が旺盛な人だったということだ。

1976年、角川書店が開催した「横溝正史フェア」の一環として、渋谷の東急デパートで「横溝正史展」が行われたときのことである。イベントの目玉として横溝先生のサイン会が企画された。私は、老齢の大作家にもしもの事がないよう、約一ヶ月かけて百冊の文庫本に前もってサインをもらっておいた。会場で直接サインできない読者のためだ。

サイン会当日、会場には百名を超える読者が並んだ。最初の十名で打ち切り、残りの方には用意していったサイン入り文庫本を購入していただく手はずになっていた。

サイン会が始まり、横溝先生が一人ずつ丁寧にサインしていく。握手を求める人には笑顔で応えておられた。十人目の読者のサインが終わった時点で私が打ち切りの合図を出すと、突然、先生が大きな声で私を制止された。

「まだこんなにたくさん並んでらっしゃるじゃないの！」と。

私はすぐに前言を撤回し、サイン会を続行した。やがて迎えた27人目、「疲れた」と先生が咳かれ、その時点で急遽サイン会を中止した。控室でお休みいただいたが、先生は中断したことをまだ気にしておられた。

翌日、お宅に電話をすると、奥様から「痰に少し血が混じったんですよ」とうかがい、申し訳なくて冷や汗をかいたことを、今も鮮明に覚えている。それでもつくづくサービス精神の旺盛な方だと思った。

もう一つ強く印象に残っているのは、先生に意外にミーハーな一面があったことだ。

ある日お宅を訪問すると、照れくさそうに頬を染めて、

「あのねえ、ぼく百恵ちゃんのファンなのよ。君んとこの社長、芸能界に顔が広いでしよう？ サインもらってくれないかなあ」と私に頼んでこられたのだ。正直、今をときめく大作家がまだ十代の女性歌手のサインを欲しがるなんて私には不思議だった。

とはいって、当時人気絶頂の山口百恵のサインがそう簡単に手にはいるとは思えず、「頼んでみます」とお答えし、その日は辞去した。帰社し、社長にその旨を伝えると、「わかった」と引き受けてくれ、数日後私の許に山口百恵のサイン入り色紙が届いた。早速お届けに伺うと、手にとって何度も眺め直し、「社長によろしくお伝えください」と、にこにこしながら言われた。子供みたいに無邪気な人だなと思ったものである。

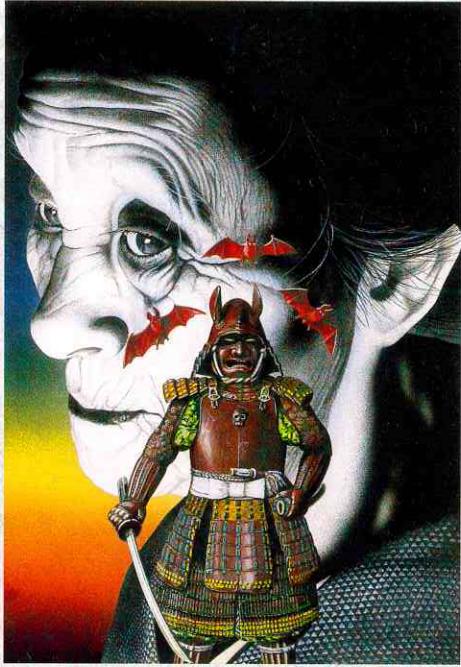
しかし仕事となると別人のように厳しい。二度目に入院されたときには多分ご自身が癌であることを知っておられたのではないか。入院準備をする奥様に「原稿用紙と鉛筆！」と命じられた。そして病院で仰向けのまま文字を書こうとし、ご自分の字にならなかったとき初めて筆を折られたそうである。倒れてもファイティングポーズを崩さなかった偉大な作家に心から敬意を表する。

最後に横溝正史先生がいつも色紙に書かれた言葉を紹介したい。

「鬼想佛心」

横溝正史その人を最も正確に表す言葉だ。

(元角川書店担当編集者)



▲『八つ墓村』

私にとっては2作目のカバー用イラスト制作依頼が横溝正史先生の代表作「八つ墓村」でした。絵柄はエアーブラッッシュの技法を多用し“火焔”を描きました。

私のカバー絵は色数多く描いていましたので、画面を引き締める事と印象的に仕上げる目的でイラストとタイトルを黒い枠で囲む装丁としたのです。

その後、横溝作品全てを「黒枠」のデザインに統一した事は、結果的に他の文庫本との区別性、独自性が強調される事と成り、販売部数にも大いに貢献できたと自負しています。

数年後に販売2500万部突破を記念した「横溝正史フェア」が実施された時に初めてポスター用の大きなイラストを描きました。

このイラストは、この度の企画展「金田一さん！出番です」のポスターやパンフレットの表紙として再び使用しています。

横溝先生の耽美でおどろおどろしい物語の面白さは当然の事として、優に四半世紀を越えてイラストと装丁で数多くの横溝作品を飾れました事は、私の描く絵も多くの読者の興味を引き、支持を得ていたからだと思っています。

あらためて、読者の皆様、横溝先生、金田一さんが、長い間私のイラストを生かして下さいました事と、さらに不死鳥の様に蘇らせて下さいました狭山市立博物館に深く深くお礼申し上げます。

(イラストレーター・版画家)

私がイラストレーターを目指しデザイン事務所に籍を置いていた頃(1970年)、ボールペンで書き溜めていた絵を1冊のイラスト集にまとめ自費出版しました。

このイラスト集を出版社や新聞社の編集部宛に送付した事から出版界との関わりが生まれました。その当時、角川書店・編集局長でおられた角川春樹氏の目に止まった様です。文庫本の汚れ防止のハトロン紙カバーを、ビジュアルを重視したカバーに変えてゆく事を企画されていた氏の意図と合致したのです。

横溝正史作品との出会い

杉本一文



▲『真珠郎』





絵のある風景——横溝正史の世界——

香月みか

「その港町の山の手は」「ある港町の山の手に」「港町の山の手通り」これは、「赤屋敷の記録」「風見鶏の下で」「双生児は踊る」の冒頭部分になります。神戸でお生まれになった横溝正史先生、その港町が頭に浮かばれることと思いますが、後の二つはどうやら横浜の港町のようです。

私は横溝正史先生の作品を絵に描くことで、唯一の喜びとしているファンです。

作品の事件現場は絵にする上で真っ先に確認しなくてはなりません。先生は乗物が大の苦手であったからでしょうか、鎌倉にお住まいの頃、東京の博文館から家に戻られる途中で横浜に立ち寄られたとのことです。馴染みの店でお酒を召し上がり、恐怖を薄められたのかもしれません。

同じ港町でも神戸と横浜、少年の頃の港町とお酒の酔いを覚ました港町ではそれぞれ違う波の音が聞えてきそうです。

神戸では神戸物、信州では信州物、岡山では岡山物を多く発表されました。

土着文化を取り入れ、土地の人を愛し、身近なモチーフに厚みを持たせ丁寧に塗り込み、時にはその土地を離れてからも、懐かしく思いをめぐらし筆を取ることもありました。石積みの洋館は幼い少年である先生が、坂道を登りながら目にした風景なのでしょうか。それは先生の脳裏に焼きつき、いたるところで引き出されていると思います。岡山の疎開時代に書かれた「蟬の首」には岡山の農村に不似合いな洋館が廃墟となって現れます。「車井戸はなぜ軋る」「八つ墓村」「人面瘡」「悪魔の手毬唄」「壺中美人」「悪魔の百唇譜」「白と黒」キーパーソンは神戸出身者であり、神戸に縁があります。

横溝正史先生は神戸を離れた後も生誕地への思いを静かに絡み付けてきます。

自然描写が美しいのも観察力の鋭さを物語ります。作品には色があり、音があり、香りがあります。花はいつも心を表しています。

愛しの名探偵金田一耕助の事件簿にスポットをあて、いくつか花選びをしてみました。「支那扇の女」に見る金田一耕助、すがれていく芭蕉は事件解決後の虚脱感を彼に



▲合い乗り自転車 『悪魔の手毬唄』より

成り代わりはかない心情を表しています。逃避行中の恋人達は「迷路の花嫁」。二人を急かすように青桐が雨に打たれています。その音はでんでん太鼓のようにパタパタと鳴り響き心を乱します。成城の桜並木、落ちたさくらんぼは五月雨に濡れながら、赤い血のようにアスファルトに流れ、読み手の心にも染み込んできます。ファン一押し「悪魔が来りて笛を吹く」の須磨の名場面。ここでもあかまんまが夕日に染まる大変美しい風景があります。少女のような仲居が、トンボと戯れている姿は金田一耕助と読み手に、ほっと一息つかせます。そこに佇む、そこを歩く、その人に似合う花選びが見事です。東京が舞台の「白と黒」、思いを寄せ合う二人は割烹旅館の門をくぐります。キンモクセイの木が一本、あの甘い香りが二人を暖かく出迎えているようです。さりげなく咲かせた花が、二人の前途を祝福しているように受け取れませんか。これがヒイラギだったらいかがでしょう、刺々しい糺余曲折な道に感じます。さりげない演出が私を描かずにはいられない気持ちにさせるのです。五感を痺れさせてしまう作風は一つ一つ、哀しみや喜びの余韻を残し伝わってきます。

金田一耕助は岡山と信州、東京ばかりを走り回っていたわけではありません。「本陣殺人事件」に挑む前は「むつかしい事件」の調査のために下阪していました。他にも関西で相当やっかいな事件」を片付けたことがあります。岡山に磯川警部、東京に等々力警部、信州に橋署長、同じように関西にも顔なじみの警部がいたでしょう。昭和20年代～30年代、黄昏の中をお釜帽で仰ぎながら金田一耕助は歩きます。赤レンガの埠に這い上がるつる草の夏の青臭い匂いと共に私の前を通り過ぎて行きました。

私は今日も筆を握ります。横溝先生の足跡を探して、浪漫の衣に含まれた色と香りに酔いしれながら。

（金田一耕助アートウエーブ

主宰）

※『横溝正史と東川崎町』

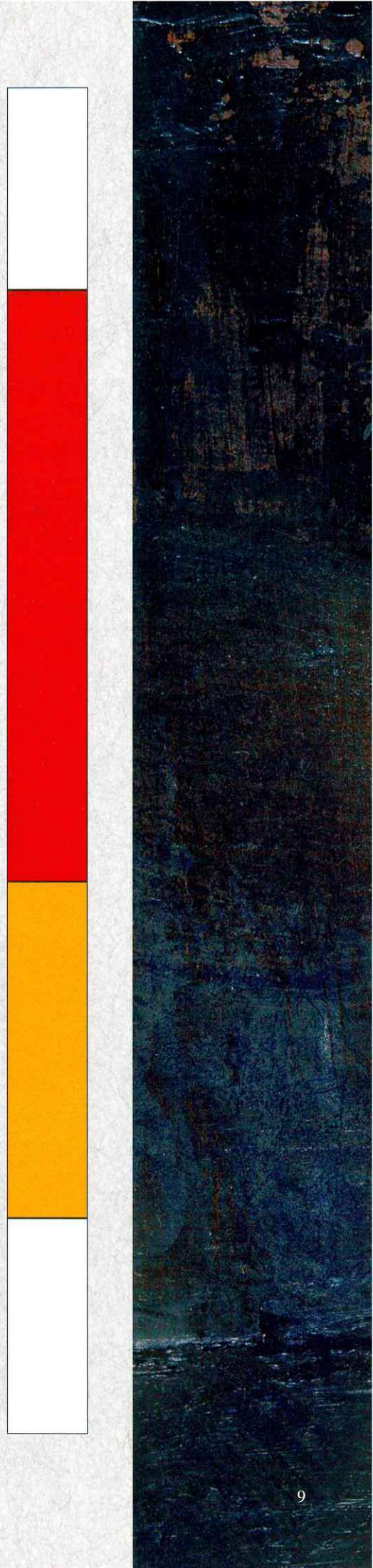
（東川崎歴史の会

編集・発行/2004年3月

31日）より転載。



▲トンネルのような坂道 『鶴』より



参考文献

- 『現代推理小説体系 4 横溝正史』横溝正史著／講談社／1972
- 『横溝正史読本』小林信彦編／角川書店／1976
- 『横溝正史の世界』横溝正史著／徳間書店／1976
- 『現代推理小説体系別巻 2 ミステリ・ハンドブック』中島河太郎ほか著／講談社／1980
- 『横溝正史追憶集』水谷準編／横溝孝子発行／1982
- 『エッセイ・縄文通信』今坂柳二著／さやま市民文庫刊行会／1986
- 『句集 二人静』横溝孝子著／富士見書房／1987
- 『大正の探偵小説』伊藤秀雄著／三一書房／1991
- 『近代の探偵小説』伊藤秀雄著／三一書房／1994
- 『血まみれ観音』横溝正史原作～高階良子傑作集～／角川書店／1995(角川ホラー文庫)
- 『横溝正史と「新青年」の作家たち』世田谷文学館編 世田谷文学館 1995
- 『対決！金田一家の一族 はじめと耕輔ミステリー大比較』W・K・Kダブル金田一研究会編著／ワニブックス／1996
- 『八つ墓村』原作：横溝正史 画：影丸穂也／講談社(講談社漫画文庫)／1996
- 『悪魔が来たりて笛を吹く』原作：横溝正史 画：影丸穂也／講談社(講談社漫画文庫)／2001
- 『世田谷ゆかりの作家たち』生田美秋・大塚正基・土井正光編／世田谷文学館／2001
- 『金田一耕輔 The Complete』小嶋優子、別冊ダ・ヴィンチ編集部編／メディアファクトリー／2004

- 世田谷文学館 <http://www.setabun.or.jp/>
- 金田一耕助アートウェーブ <http://homepage2.nifty.com/a-to/>
- 金田一耕助博物館 <http://www.yokomizo.to/index.htm>
- 表紙絵メインギャラリー http://www5d.biglobe.ne.jp/~mixed_up/yokomizo_gara_index.htm
- 弥生美術館・竹久夢二美術館 <http://www.yayoi-yumeji-museum.jp/exhibition/yayoi/next.html>
- 横溝正史エンサイクロペディア http://homepage3.nifty.com/kakeya/ys_pedia/ys_pedia_index.html
- 横溝正史(ヨコミゾセイシ)goo 映画 <http://movie.goo.ne.jp/cast/87674/index.html>
- 横溝正史ブックカバーライブラリー <http://homepage3.nifty.com/yokomizo/>
- 横溝正史メモリアル <http://www.yokomizo.net/>
- 横溝World <http://www7.ocn.ne.jp/~yokomizo/>

《ご協力いただいた方々》

本企画展の開催およびパンフレットの作成にあたり、次の方々や機関にご協力を賜りました。
心よりお礼を申し上げます。(順不同、敬称略)

横溝亮一 監修	角川ヘラルド映画・東宝	稻並千枝子(写真提供)
浜田知明	狭山語りの会	今坂柳二
杉本一文	狭山香道俱楽部	蒲池真純
香月みか	ミステリー文学資料館	菊田一樹(写真提供)
橋爪懋	朗読グループ あうん	黒須秋桜
世田谷文学館	朗読研究狭山会	星野智彦
	朗読サークル くもの糸	狭山市立図書館
		狭山市立博物館ボランティアの皆さん

「甲蟲の指輪」

横溝正史

—

あれは実際不思議な事件です。犯人はまだつかまりません。或いは永久につかまらないかも知れません。

——と、ある日、私のところへ訪ねて来た木藤庄吾という一面識もない男が、ふいに奇妙な話を始めたのである。以下、彼の話をそのまま、書いて見よう。

その晩僕は、鎌倉の友人のところで泊めて貰うつもりで、横須賀行きの電車に乗っていました。土曜日の晩のことです。銀座で飲み歩いたので少し酔払っていたのです。電車に乗ると眠くて仕様がない。つい、「うごく」と居眠りをしていました。

すると、誰か僕をゆする者がある。ほんやりと眼を開いてみると、傍に品のいゝお婆さんが立っているのです。

「失礼しました、この次は横須賀ですからお起したのですけれど……」

お婆さんは片頬に微笑を浮べながら言います。それを聞くと僕ははつとしました。周章で、座席から立上ったのです。すると、僕のその様子で察したものか、お婆さんは尚も微笑を継げながら、

「おや、それではあなたも乗越しですか。鎌倉？ 逗子？ そう、鎌倉でお降りになるつもりだったのですから」

ほほほほほとお婆さんは笑つて、

「実は私も逗子で降りる筈のところ、つい乗越してしまつたのですよ。」

と言つのです。

一体、この電車は横須賀行きの最後の電車ですから、これで乗越してしまうと、もう引返すわけにはいかないのです。僕はがつかりしました。お婆さんはそれを見ると、僕を慰めるつもりか、側へ寄つて来て、いろ／＼と話しかけます。見たところ、五十五六の品のいゝお婆さんなのですが、仲々話し好きと見え、それに気分も至つて若いのです。

言い忘ましたが、その時、その車の中には、僕とお婆さんの一人きりしか居ませんでした。僕はお婆さんと話をしているうちに、だん／＼眼も覚め、頭もはつきりして来る。そのうちにふと、僕はこのお婆さんが横浜から乗つたことを思い出しました。その時にはたしか二人連れだったのに、今見るとその連れが居ないのです。

「そう／＼、あなたにはお連れがあつたようですね。あのお連れさんはどうでしたのですか。」

「あ、あの子ですか。あれは大船で降りましたよ。あれは藤沢の方へ参りますのでね、大船まで私を送つて来てくれたのです。」

お婆さんはそう言つて笑つています。そういうは、僕は始終うつら／＼と半分眠つていたのですが、それでも時々眼がさめていたと見えて、お婆さんの連れの青年が、大船で降りたのをほんやりと覚えていいます。

十八九の、小柄な、派手な洋服に鳥打帽をかぶつた、なか／＼美貌の青年でした。

「降りる時、乗越しちゃいけませんよ、何度も念を押されときながら、つい年寄りだものですから、寝過ごしちゃつて……」

お婆さんはそう言つて笑いましたが、その時ふと思いついたように、懷中から小さい缶を取出しました。

「そう／＼、あの子が眼鏡をさしにこんなものを置いて行つてくれたのですが、一ついかゞです。」

見ると鏡紙にくるんだチョコレートです。

「い、え、僕は沢山。」

「そう、お嫌いですか。では失礼して一つ……」

お婆さんはそう言つて一つ頬張りましたが、その時ふと缶の中を覗いて、

「おや？」

と言つて、小さい指輪をつまみ出しました。見ると、虫形の宝石の入つた立派な指輪です。

「まあ、あの子とした事がそ、つかしい。」

とお婆さんは半分獨白のよう、半分は僕に聞かせるためらしく、

「いえね、大船で下りたあの子の指輪なんですよ。きっと手洗いに立つた時、石鹼で抜けたものだから、こんなところへ入れといて、そのまゝ、忘れて降りたに違ひありませんわ。」

お婆さんはそう言ひながら、指輪を何処かへしまおうとしましたが、その時、急に変なことが起つたのです。今迄元気にしゃべつていたお婆さんが、ふいにがっくりと前へのめりました。そして、うつむいたまま、一二度手足をびく／＼と僕はせていましたが、そのまゝ、石のようになくなつてしまつたのです。

僕はあつけにとられてそれを見ていました。しかし、暫くたつてもお婆さんが顔をあげる模様もないで、そつと肩に手をかけると、

「お婆さん——、お婆さん——」

と一二度搔すべつてみたのです。

が、すぐ僕は、思わずぎょっとして座席から立上りました。

お婆さんは死んでいました。たつた今迄元気よく語っていたお婆さんが、一瞬にして、まるで死なぬ蝶のように死んでいました。

二

僕がどんなに驚いたか。——そんな事は今更申上げる迄もありますまい。何しろ、このふいの出来事に呆然としているばかりで、何が何やらさっぱりわけが分りません。第一、いかに年寄とはいえ、たつた今まで、あんなに元気におしゃべりをしていたお婆さんが、こう簡単に冷たくなってしまうなんて、どう考えたってわからぬ話です。

でも、恰度幸い、その時分、電車は横須賀へ着きました。そして僕の訴えによつて、駅の中はたちまち大騒ぎになつたのです。もちろん僕も、そのとぼつちりを喰つて、いろいろと面倒な質問を受けなければなりませんでした。

お婆さんの身許はわかりませんでした。何一つ、手懸りになるような書物は持つていなかつたのです。そこで結局、正体不明の変死人という事になつて、その晩は一先ず、僕は許されて駅長が親切に教えてくれた駅の近くにある宿屋へ泊まる事になつたのです。さて、その翌日のことです。

宿屋を八時頃に出て、また鎌倉まで引返すつもりで、横須賀駅まで行つたところが、そこに大変な騒ぎが僕を待ちかまえていました。

と、いうのは、昨夜あれから医者を呼んだり、警官に立合つて費つたりしてお婆さんの身体を調べたところが、何んどそれが普通の死ではなくて、青酸加里とかの中毒だというのです。それだけならまだよろしい。こゝに奇々怪々なのは、そのお婆さんというのが、本当は年寄ではなく、まだ二十代の若い女が変装していたとわかつた事です。

しかもその正体たるや、何んという事でしょう。その当時日本でも随一の人気女優と言われた××キネマ会社の大スター、最上千枝子だったというじやありませんか。

事件はこゝに於いて、急に奇怪な謎をもつて塗りつぶされました。今までには、単なる老婆の、卒中か何んかの突然的死だと思っていましたが、青酸加里の中毒だとわかり、しかも被害者は今を時めく人気女優、最上千枝子だとわかつたのだからたまりません。

駅の中は上を下への大騒ぎ、そこへひょっこり、唯一の目撃者たる僕が顔を出したものですから、忽ち警官連中に包囲されて、それは／＼厳しい訊問です。

そこで僕は、昨夜からの出来事を、もう一度逐一申立てねばなりませんでした。こゝで、誰しも怪しいと思われるは、老婆——じゃなかつた——、あの最上千枝子と一緒に横浜から乗込み、大船で下りたあの美少年のことです。

あなたたは御存知かも知れませんが、青酸加里という奴は、胃の腑へ入ると、瞬間にして人を殺すそうですね。そこで、僕の見たところによると、最上千枝子が最後に口に入れたものは、実にあのチョコレートです。だから、青酸加里はてつきり、あのチョコレートの中に入つていたと見なければなりません。

そして、老婆の言葉によると、そのチョコレートというのは、あの美少年が眼鏡をまことに言って置いて行つたものなのです。だから、犯人はどうしても、その美少年という事になります。

さて、こゝで最上千枝子の奇怪な変装ですが、これは後にその理由がわかつたのです。その晩千枝子は、翌日の日曜日に、逗子の養神亭で開かれる××キネマの祝賀会の準備に、幹事として先に赴く事になつていたのです。そこで思うに彼女は、顔馴染になつてゐる養神亭の女中をはじめ、後から来る××キネマの連中をあつと言わせようという魂胆から、わざとそんな老婆に変装していたものだらうという事です。最上千枝子というはそんな女だつたそうです。

ところで、どうだとすれば、あの奇怪な美少年は、この老婆を最上千枝子と知つていていたのでしょうか。若し知つていていたとすれば、彼女の近親の者か、極く親しい友人に違ひないが、さて、彼女の知人、親戚などを悉く調べてみたのですが、どうしても、僕の言う人相に匹敵する青年はいないでした。

或いは、日頃から彼女に目をつけていた不良少年の類いではないかと言う事になつて、その方も厳重に捜索されたのですが、こゝにも一向手懸りはありません。こうして、遂にこの事件は五里霧中に入つてしましました。

三

さて、話をもとへ戻して、横須賀駅で厳重な取調べを受けた僕の事になりますが、その時僕は、大へんな過失を演じたのです。というのは、この物語の初めの方でお話を聞いておいた、あの甲虫の指輪の事です。僕はすつかりその指輪の事を忘れていたのです。

しかし、そうかと言って僕を責めてはなりませんよ。何しらあまり意外な出来事で、すつかり気が転倒している時のことです。

それに若し、刑事の方からその指輪でもつきつけてくれれば、僕たつて、その前夜の事を思い出したのでしょうか。どうしたものか、誰もその指輪を死体の身の周囲に発見したものはなかつたと見えて、僕に一言も指輪の事は申しませんでした。

今から考へると實に残念です。最上千枝子は死ぬ間際に言つた事ですが、その指輪こそ、犯人と想像される、あの美少年のものだつたのですからね。それから手繕つて行けば、或いはあの奇怪な美少年の身許がわかつたかも知れないのです。

しかし、とも角、こうしてこの事件は遂に迷宮入りをしました。美少年の姿は、大船から煙のようく消えてしまつて、その後警察の躍起となつての捜索にも拘らず、遂に行方はわからなかつたのです。

え？ 何んですって？ そこまでなら、誰でも新聞でも知つてゐるつて？ 成る程、その通りです。しかし、僕がこの事件をあなたに話そつと思つたのは、この事件に後日譚があるからです。これは僕だけしか知らない事です。そして、あなたに初めてお話をしますよ。

事件があつて一月程後の事です。つまり世間がそろ／＼最上千枝子の事件を忘れはじめた頃ですね。

ある日僕は雑草で活動写真を見たのです。偶然にもそれは、最上千枝子が生前動いていた××キネマ会社の映画でした。しかし、主演する女優はむろん、最上千枝子ではなくて、千枝子と競争的地位にあつた紫安里子という女優で、千枝子の死後はその後を襲つて、まんまと主脳女優の地位をしめた女優です。

こゝで僕は、驚くべき発見をしたのです。実際僕はあの時あまりの驚きのために気が遠くなりそうだったくらいです。

御存知ですか。

「悪魔の家」——というのが、その時僕の見た映画だつたのです。紫安里子はその映画の主人公でした。さて、三巻目かに、里子の扮した女主人公が悪漢にピストルを向けるところがあります。そこで、ピストルを握った里子の右手が大きくクローズアップになるのです。

ピストルを握った里子の手は、恐怖のために大きく震えます。そして最後に利東曳金を引くのです。

その時です。僕ははつきりこの目で見たのです。里子の右手の第三指に嵌つている指輪。——え、間違いはありません。たしかにあの指輪でした。甲虫形の宝石の嵌つた、あの指輪に違ひありませんでした。

あ、何という恐ろしい事でしょう。その日僕は映画館から出ると、近所のプロマイド屋へよつて、あらゆるスタイルをした紫安里子の写真を買って帰つたのですが、もう間違いはありません。

里子に鳥打帽子を着せ、派手な洋服を着せると、寸分違わぬ、あの美少年になるのです。

お分かりになつたでしょう。警察で躍起となつて捜索したにも拘らず、到底あの美少年の行方のわからなかつた理由が。……

それもその筈です。本当は男でなく、女だったんですもの。——

× × × ×

× × × ×

「やむ！」

と私は初めて聞く意外な物語に、思わず長い溜息を洩らしたものである。

「しかし、その指輪はどうなつたんだろうな。それさえあれば、里子を訴える事が出来るというのだね。」

と私が常やかに言うと、この物語の話手である木藤庄吾はしばらくかじ／＼としていたが、やがて思い切つたように、

「指輪ですか？ 指輪なら此處にあります。」

そう言つて彼はポケットから、恐る恐る甲虫形の宝石の嵌つた、特徴ある指輪を取出したのである。

「や！ や！」

と私が驚いて、思わず彼の顔を見直すと、木藤庄吾は嚴肅な声で静かに言つたのである。

「誤解なさらないで下さい。僕は決して、この指輪を盗んだのでも隠したのでもありませんよ。実は今日、偶然の機会から発見したのです。あの晩はひいていたズボンを二、三日前洗濯屋へ出したのですが、それが今日戻つて来て、その時、この指輪がついて来ただのです。洗濯屋の話によると、ズボンのポケットに穴があいていて、そこから縫目の間に落ちこんでいたというのです。つまり最上千枝子は発作を起したとき、この指輪を握っていたのですが、僕の方へ倒れたはずみに、僕のズボンのポケットの中に、こいつが滑り込んだのですね。ところで、今日お訪いしたのはほかでもないのです。この指輪をもつて、警察へ一切を届けて出たものかどうか、それをあなたに御相談にあがつたのですが。……」

木藤庄吾はそう言つて、凝つと私の顔を見詰めたのである。

さて、私ですか。あ、それに対して私は何んと答える事が出来よう。私は紫安里子の良人なんだから。(終)

解説

横溝正史氏は、大家とは思えぬくらい、気さくに原稿の依頼に応じた作家で、地方の誌紙に発表された作品も、かなりの数におよびます。

生まれ故郷の神戸や、結核の静養をされた土地である信州の新聞はもちろんのこと、戦前には、江戸川乱歩氏との合作として、北海道の新聞に長編を連載していますし、戦後の第一作となつた短編は、仙台の新聞社発行の週刊雑誌に発表されたものです。金田一耕助が登場する長編や、人形佐七の捕物帳にも、地方の雑誌や新聞が初出だった作品のあることが判っています。

この短編も、名古屋の「新愛知」という新聞の付録に載つたもの。意外な展開を連続させることで、読み手の意表を衝くことを主眼とした奇談です。

(浜田 知明)

Y oko mizo Seishi

